



びわ法師は、どんな人たちだったの



びわをひきながら、「平家物語」などの叙事詩じょじしを、
節をつけて語って、くらしていた人たちだよ。

びわ法師は、びわという楽器を伴奏ばんそうに、節をつけて、叙事詩（長い物語になって
いる詩）を語った、ほとんどが目の不自由な人たちでした。おもに活躍かつやくしたのは中
世かまくらじだい あづちももやまじだい（鎌倉時代～安土桃山時代）で、貴族・武士のやしきや、道ばた、お寺・神社の
境内などで語り、お金や物をもらって、くらしていました。

びわ法師きげんの起源には、二つの説がある

びわ法師の起源は、蝉丸せみまるという説と、天夜尊あまよのみことという説があります。蝉丸は、宇多
天皇てんのうの第8皇子おうじに仕えていた雑色ぞうしき（地位の低い役人）とか、醍醐天皇だいごてんのうの第4皇子と
か、いわれています。また、当道とうどうというびわ法師の団体では、仁明天皇にんみょう（9世紀
前半）の第4皇子さねやすしんのうの人康親王を起源とし、天夜尊として祭っています。

鎌倉時代から、軍記物語をおもに語った

平安時代のびわ法師が、何を語っていたかはわかりません。鎌倉時代に、「平家
物語げんべいせいすいき」「源平盛衰記げんぺいせいすいき」などの軍記物語（戦乱を題材にした物語）が生まれると、び
わ法師は、軍記物語をおもに語るようになりました。その中でも、びわ法師が得意とした
のは、平氏の繁栄と滅亡をえがいた「平家物
語へんえい めつぼう」です。「平家物語」を語るときは、びわ
を伴奏に、節をつけて語り、これを平曲へいきょくとか、
平家びわといいます。

